慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	史觀と政治
Sub Title	
Author	内藤, 智秀(Naito, Chishu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1939
Jtitle	史学 Vol.17, No.3 (1939. 4) ,p.31(371)- 56(396)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19390400-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

史觀と政治

內藤智秀

一

歷史は時間的に變遷する人類發展の經過を辿るものであるが故に、その研究對象の本質は動的なものであると云へよう。然るに流れて止まぬ時間的な此の變遷發展は何によつて進められて行くのであらうか。歷史的變遷の動因には物質的なものがあり、精神的なものがあり、又文化的なものもある。而もその物質的なものは經濟的、生物的乃至地理的と云ふ樣に、精神的なものは個人的、團體的、社會的、國家的と云ふ樣に、更に文化的なものでも發明、發見、學術、制度等と云ふ樣に、極めて複雜な原因によつて動いて行くのである。且つ各部分に於ても更に複雜な諸因子が輻輳し、相依つて歷史の動力を構成してゐるのである。從つて之等の歷史的動因を一言を以て述べ盡す事は不可能であらう。强いて之を云ふならば多くの場合時勢の力と云ふやうな言葉を以て表現されてゐる。

さて歴史に於て之を時間的に見て、最も重要な要素となるのは吾人の直面する現代史であると考へるが、今日の現代史から過去の歴史を顧みる時、右に述べた所謂時勢の力と云ふものは大部分、政治的統制とか經濟的統制とかの様な統制的なもの、更に之を簡單な言葉で極言すれば政治そのものに他ならぬのではないかとさへ考へるのである。

最近自分は所要あつて汽車の旅の途中丹波の綾部に下車したが、その際自動車の運轉手は左の様な意味の事を語つた。即ち大本教の盛んな時分には此の町へは數十萬人の信者が常に集まつてゐたので、此の鈴蘭の電燈で立派に飾られた大きな鋪裝道路は自動車で通る事も出來ない様な雜沓であつた。然し多數の警官が政府の命により一度何所よりか集まつて來て、ダイナマイトを以て大本教の殿堂其の他の設備を地下室に至るまで悉く破壞して了つてからは、殿堂のあつた屋敷は勿論幾條の大きな鋪裝道路も雀羅を張る有様である。政府と云ふものは、恐しく强い力を持つものである。と云ふのであつた。

その後二週間にして自分は昭和十四年の元日早朝某所に元旦詣でをした。然るに此所には幾萬幾十萬とも數知れぬ多數の參詣者が集い來つては何れも神前に嚴かな氣分で額づくのであり、勿論自分もその一人であつた。自分は此の際再び綾部の光景を思ひ出して、此の二つの持つ盛衰を歴史的動因から對照して考へて見たのであつた。

之等盛衰の因由は勿論萬國無比な國體の精華から理解されるのであるが、同時に其の背後には政治的

に偉大なる力の存在する事を考へるのである。之は單に所謂時勢の力と云ふのみでは解明されたる樣にも考へるのである。

斯く政治が歴史の最大動力者なりとすれば、吾人の史觀も順緣にしろ又逆緣にしろ政治に依つて左右される事は當然ではあるまいか。之を日本史學史に於て見るならば、例へば今日まで史學史上の一の史觀として認め得らるゝ所の語部（カタリベ）のそれの如き、聖德太子の如き、慈圓上人の如き、乃至は北畠親房、林道春、德川光圀、新井白石、賴山陽等のそれ等の如き之等の史觀は、何れも單純なる學者の史觀と云ふよりは、寧ろ多分に政治的な力を以つて働いてゐた事が知られるのであるが、斯樣に考へる時我々は、各時代の政治がその時代人の史觀を作つて來たものであるとさへ云ふ事が出來るであらう。之は明らかな事で我が國の場合は之以上説明を要しない事とも考へる。

此の關係は同樣に西歐諸國の史學史に於ても承認されるのである。例へば久しく我が國の歴史學を指導してゐたドイツ史學に於ては、第十九世紀になると他の學科と等しく純粹な科學的見界から研究の歩が深められ、ランケ流の學問的な史觀が決定的な方法となり、此の學問的であると云ふ事は極めて崇高な事であると考へられる樣になつた。

然るにそのドイツでも第二十世紀に於ける世界大戰が終局を告げてからは、第三帝國の構成が主張されナチスの政權が確立される頃から、政治上にも亦文化の上にも反猶太主義、國粹主義等が甚だ濃厚と

なつて來て、在來の如く、只だ純科學的な態度を以て歴史を眺め史觀を樹てる事は他の科學の場合に於けると等しく許されない樣になつた。斯樣にして歴史を學ぶものに對し一種の疑惑の念を惹起せしむるに至つた。

二

元來ドイツではドイツ皇帝マキシミリアン一世がシャーレマン大帝の例に倣つて、ウィンナの朝廷にドイツ人文主義派の主なる歴史家を召集したが、此の時代にドイツの國民的歴史文學が始められた。卽ちコンラード・ケルチス（Conrad Celtis）はタキッスのゲルマニヤを廣く紹介し、爾來數世紀間に亙る學界論爭の門戸を開いた。

その後ゼハル（Siwoa Sechar）とかフレヘル（Marquard Freher）等の努力によつてドイツ國民史料の蒐集事業が開始せられ、ゴルダスト（Melchior Goldast 1578—1635）は中世ドイツ史に關する有名な文書資料を公にした。そして之が後世に遺るドイツ國民史料の基礎となつたのであつた。

有名な哲學者のライプニッツ（Gottfried Wilhelm Leibniz 1646—1716）はドイツ國民史料を蒐集せんとする希望を以て活動したが、政府から必要な補助金を給與せらるゝに至らず、單にイタリヤの皇帝派に反對する法王派のゲルフ（Guelphs）の歴史に關する史料を蒐集したに過ぎなかつた。然し彼が史料

を正確にする事と之を寫す事の必要を力說した點はドイツ國民史學史上大なる貢獻と云ふべきであらう。此のライプニッツが哲學者又政治家であつて單なる學究の徒でなかつた事は周知の事である。

尙ドイツ史料蒐集の偉大なる近世的事業としては有名な「ゲルマニヤ史料」(Monumenta Germaniae Historica) があるが、それは自由戰爭の結果フォン・スタイン (Heinrich Friedrich Karl Baron von Stein) によつて始められたのであつた。スタインはプロシヤ首相となつた人物であつたが、第十九世紀のウィーン會議に續く反動的傾向に刺激されて、ドイツ史に對する一般的興味を惹起せしむる事に努力活動した。卽ち彼の活動の動機は祖國愛にあつた。彼は私財及び友人の財を集めて、古代ドイツ史協會 (Gesellschaft für Deutschlands Ältere Geschichtskunde) を創立し、ハンノヴァーの古文書學者ペルッ (George Heinrich Pertz 1795—1876) の援助によつて、終に編纂事業を大成した。卽ちペルッは優れた才能と又半世紀間の日子とを以て、編纂事業援助の任を果した。此のドイツ史編纂の事業はローマ時代から中世を通じてのドイツ史に關する重要史料を含むもので、今日に至るまで出版されたもの全部で百二十冊に達してゐる。之はドイツの科學的歷史記述の發展史上眞に注目に價するもので、後には之にドイツの各州の歷史が加へられ、又ドイツ宗敎史、ドイツ外交史乃至はフレデリック・ウィリアム大選擧侯時代の偉大なる個人の業績に關するもの迄も徹底的に蒐集され加へられたのであつた。

尙ほドイツで歷史家としての絕頂を思はせるものはランケ (Leopold von Ranke 1795—1886) であ

る。彼は其の著「宗教改革史」に於てルーテルをドイツの偉大なる國民的英雄に祭り上げたが、彼の後繼者の内には或る種の理想主義的傾向を認める事が出來る。然しそのランケでさへドイツ民族史がプロシヤ學派の勃興と共に愛國的となり又國粹的となる際に當つてはプロシヤ及びホーヘンツォーレル家に對する賞讃の辭を惜しまなかつた。卽ちプロシヤ史に關する彼の多數の著作は、バヴァリヤ公の面前に於て講義したプロシヤ勃興史の如きに於て見る樣に、多くの民族的な分子を認めるのである。

卽ち彼の後に出たドイツの史學者はハウゼル（Ludwig Hausser 1818—1867）でもユンケル（Maximillian Juncker 1811—1886）でも乃至はシュミッド（Adolf Schmidt 1812—1887）でも何れもドイツ統一の進展に對し、プロシヤの爲めに勇敢に貢獻した人々であつた。

尙ほ此の當時からドイツ史學界の巨星であつたドロイゼン（Johann Gustav Droysen 1804—1884）に至つては、プロシヤ主義の最初の愛國的史家の巨頭と目せらるべきであらう。卽ちランケが科學的歷史の最高峰を行くものであるならば、ドロイゼンは愛國的歷史の基礎的理念を作つて遂にはトライチュケを生んだと云ふ事が出來るであらう。ドロイゼンはドイツ統一主義を唱へ常にホーヘンツォーレルン家に對する賞讃の辭を惜まなかつた。尙ほ彼の歷史家としての地位及び著作は皆人々の認める所であるが、彼が第十九世紀に於けるドイツ精神生活に寄與した點は甚だ多く、在來ドイツ精神生活は文學的又は審美學的に動かされたものが多かつたが、彼は之を政治的倫理的に向けて、その促進と完成の爲めに

貢獻する所甚だ大であつた。

彼は三十六歳から四十六歳に至る十ケ年は役人として政治的に活躍し愛國的に活動したが、その後再び學界に入ると益〻その思想は精練された。彼はドイツ民族の自由統一を目ざし、之を以て政治家としても亦歴史家としても一貫したのであつた。卽ち人間に於ては精神的なものと物質的なものとの相對する二つの特色のあるを認め、之を以て歴史と自然とであると云ひ、此の對立が又互に調和しつゝ此所に新なる發生を見ると云ふ。又此の調和と矛盾の繰り返しが永遠の運動の進化となると云ふ。而も此の運動は機械的なものでなく一の目的に向ふ生きた過程で、失望と希望、苦痛と快樂、緊張と弛緩、矛盾と調和、之等が互に兩極端に奔るが、終には吾人は神と云ふ無限なものに到達する一の有限を吾等人間の中に認めざるを得ざるに至ると云ふ。

更にドロイゼンが未だ遺して置いた所はトライチュケ（Heinrich von Treitschke 1834—1896）によつて拾ひ上げられた。卽ち彼の名著「第十九世紀に於けるドイツ史」はミシュレー（Michelet）とかマコーレー（Macaulay）乃至はフルード（Froude）等の歴史と並んで近世歴史學の傑作として著名となつた。彼も亦歴史家であると同時に國民自由黨員とか汎獨主義者乃至軍國主義者として實際政治社會に活動したのであつた。

尙ほ又プロシヤ主義の最後の巨頭としてはジーベル（Heinrich von Sybel 1817—1895）をあげなけれ

ばならぬ。彼は學生時代一年志願兵として入營してゐた頃、ランケの研究室に出席し、又法學にも耳を傾けたが、「哲學なしには歴史家は成立しない」と云ひ、又民族の發展は制度によらず人によると述べ、發憤なくして歴史は編纂されないと云つて、個人の力が歴史の動因として如何に偉大であるかを説明した。彼はランケの弟子であつたが、ドイツ統一の擁護者となり、佛國大革命史を公にして佛國の政治的無能を論じ、ドイツ民族の政治的優越さの宣傳に力め、ビスマルクによるドイツ帝國の基礎を論じ、ビスマルクの政治外交の辯護者ともなつた。

その後世界大戰以後に活躍した人々ではシェフェル（Dietrich Schäfer 1845—1929）の如きがある。彼は極めて强硬な民族主義者であるが、その著「世界近世史とドイツ史」はドイツ愛國者としての彼の地位を認めるに十分である。

斯樣にドイツに於ても後世に歴史的に偉大なる足蹟を遺したものゝ多くは、時代的勢力、國家的勢力を認め、更に彼等自身が歴史を作る政治家その人、社會を指導する人々それ自身でもあつた。ランケの如きも當時の政治的勢力たる啓蒙的な流れに乘じ、之を容認し之を指導して行つた所に彼の後世に遺る偉大さがあつたものとも考へられる。卽ち何れも各時代の政治的勢力を認め、之によつて自己の史觀を擴大して行つたものと言はざるを得ないのである。

三

此の關係はフランスに於ても亦よく認められる。フランスで國民史の編纂又はその史料蒐集事業乃至史料の分析が注意される樣になつたのは第十六世紀末に屬し、ドイツのそれより猶一世紀間後れてゐる。卽ち此の運動は一五七四年ホットマン（François Hotman）氏のフランコ・ガリア（Franco-Gallia）の出版された時から始まるものと見られる。その後此の事業は第十七世紀の初期に至る間に多數の人々によつて試みられた。此の事業が眞に科學的で批判的になつたのはヅシェーヌ（André Duchesne 1584—1640）の努力に始まるのであるが、之等の人々は何れも單なる學究的な考からしたものでなく、民族的な乃至國家的な立場からしたものであつた。

更にフランスで第十七世紀の後半及び第十八世紀の前半に於ては、フランス國民史料蒐集事業がパリーのサン・ゼルマンのモール（Maur）學會內のヴェネデクト學僧によつて試みられた。此の學會はモビロン（Fean Mobillon 1632—1707）に指導され地方史の編纂にも從事したが、會員の多數が僧侶であつた事は勿論である。

尙ほ第十八世紀の後半になると僧侶以外の俗人によつて國民史の編纂に注意されたが、それは一六六三年コルベール（Jean Baptiste Colbert 1619—1683）によつて創設された學士院の活動によるのであつ

た。彼は歴史家と云ふよりは寧ろ政治家で財政に通じマザレンの知遇を得、その遺言により、ルイ十四世に推擧されフランスの紊亂した財政を救ひ、民力を主とし重商主義をとり所謂コルベルティズム（Colbertism）を採用した。此の學士院は小學士院とも云はれるもので考古學や歴史學の研究に關し多大の努力を拂つたのであつた。之等が原因になつてフランスの民族的意識はルイ十四世の時代には正にその絶頂に達した。此の時代に於てフランスでは所謂國家主義的施設が社會萬般に亙つて實施されたのであつた。その文化方面に於てゞもドイツの宗教改革、イタリヤの文藝復興と相和して此所に渾然として赫赫たるフランス文化を形成した。之が第十九世紀の初期になると政治的に發現して此所に民族主義への展開を示したのであつた。此のフランスの民族主義は傳統と環境とに目覺め、同一民族、同一國語の旗幟の下に堅く團結せんとするに至り、此の思想は第十九世紀の中葉になると猛烈な民族統一運動への烽火となつたのであつた。

即ち中古以來歐洲の懸案であつた隣國ドイツの統一は大成され、イタリヤの統一も完成されたが、ナポレオン三世はビスマルクの所置に憤慨し、出來かけたドイツ統一を妨害しようとしたが、時代の大勢に抗し兼ねて遂にそれは失敗するに至つた。プロシヤに於てスタインがドイツ國民史編纂の爲めに活動してゐた頃、フランスでは御用學者としてギゾー（François Guizot 1787—1874）が活躍してゐた。彼は專ら政界に飛躍してからも、第十三世紀に至るまでのフランス國民史約三十冊を出版したのであつた。

ギゾーは歴史家としてよく知られ、その歐洲及び佛國文明史は夙に我が國でも飜譯されて廣く紹介されてゐるが、彼はニーム生れの政治家でフランスのルイ・フリップの時代には内相として保守主義の活動を爲し、チェールに對抗して輝しい手腕を示したのであつた。

其の後フランスでは大革命に對する浪漫的な考から國民運動を特種の方面から觀察する事が行はれる樣になつた。例へばフランス文部省内に委員會を設置し、大革命の經濟史に關する未發表の文書公刊を監督する事となつたが、之は佛國で有名な歴史家達によつて加勢されて一九〇六年以來「佛國革命の經濟史的史料集」が公刊され、既刊のものだけでも約百冊を數ふるに至つた。此の事業もジョーレイ（Jeon Jourès）と云ふ歴史家であると同時に政治家たる人物が時の政府を說いて開設したのであつた。

尙ほ個人としてはシャトーブリアン（François-Auguste be Chateaubriand 1768—1848）を見遁す事が出來ない。彼は佛國浪漫派の文學者で子爵に列せられ、革命の前後には陸軍の將校であつた。そして後には上院議員となり、又大使或は外務大臣の要職にもついた事のある人物である。彼は一八三〇年之等の要職から隱退して後、十八年間、主として文學的、歴史的方面に活動し「クリスト教國の精神」とか、「殉教者」等の著書を公にし、フランスの民族主義的物語を書いて、國民思想を指導するに與つて力があつた。

其の外フランスでは此の方面に功蹟の多かつた歴史家が尠くなかつたが、クーランヂュ（Numa De-

nis Fustel de Coulanges 1830—1889）とかラマルチン（Alphonse de Lamartine 1795—1869）とか乃至チエール（Louis Adolph Thiers 1797—1877）の如き何れもフランスの生んだ歴史家として異彩を放ち、又その業蹟の顯著なるものあつたが、彼等は何れも單なる歴史の學究の徒ではなかつた。彼等はフランスの政治家であつて一方に於て立派な歴史的著作を遺すと共に、多くの政治的才幹と手腕を示し、官吏としての要職にもついてゐたのであつた。

吾人は紙面の都合で、今此所ではそれ等を詳說する事をさけるが、要するにフランスの民族主義的史觀は特にフランスがプロシヤの爲めに一八七〇年完全に敗北したが爲めに受けた刺激にも多大の影響を受けた。ゴルス（Gorce）とかソレル（Sorel）の如き科學的歴史家達は普佛戰爭に關し比較的公平に說明してゐるが、それでも他の國民と共に超愛國的な熱を持つてゐた事は當然である。卽ち之等のフランス人は戰爭を以て愛國的乃至宗敎的義務とも考へ、之を聖戰として敍述しゐる。卽ちフランスでは戰は掠奪の爲めにするものではなく、人々が神の選手として働く事であり、正義を守る騎士として戰ふのであると云ふに至つた。

それ故にフランスでは一八七〇年の普佛戰爭以來極めて反省的に又自制的ではあるがブレンタノ（Franz Funck-Brentano）も佛國民史の叢書の中に極めて愛國的に述べてゐる樣に、又佛國民史の中ハノトー（Gabriel Hanotaux）が「戰後の偉大なる協同事業」と題してフランスの愛國熱を說明してゐる通り

フランスの歴史家達の史觀は尠くとも業蹟を後世に遺すもの多くは愛國的であつて、それが必ずしも所謂學究的のものではなかつた。否寧ろ學究的に見える史觀を有するものでも、或は其の時代の風潮から割り出されたものであつて、所謂啓蒙的な時代には、學究的な史觀が卽ちその時代の政治に適應してゐた史觀であつたと言ふ事も出來よう。兎に角歴史家の史觀は、各々の時代の思潮、一層具體的に言へばその時代の政治的勢力から割り出されたものが大部分であつた事を、吾人は今フランスに於ても見るのである。

四

吾人は更に英國に於て此關係を檢討して見る事とする。此處では英國民族史的な史料を組織的に蒐集し始めたのは第十九世紀の初頭であつたが、それはギボン（Edward Gibbon 1737—1794）が生前主張した事に起る。卽ち彼の首唱で學者達は英國中世に於ける歴史家の作物を蒐集する事となつた。ギボンは有名なローマ帝國衰亡史を著すのに十八年間の歳月を要したのであつたが、その文獻の確實で批判の公平、又洞察力の深い事は驚嘆に價するものがあつた。彼は英國民族史の必要は認めてゐたけれども、その實蹟を上げる能はず。寧ろ英國の民族的優越さを甚だ低く評價した。又彼は舊敎に改宗してはローザンヌに追放され、古代に憧れては外交官を志望しても其目的を遂げなかつた。それでも彼は數回に亙つ

て議員にも當選し、又官吏に採用された事もあつた。要するに彼も單なる學究の徒ではなく政治的な多くの影響を受けつゝ歴史の研究に從事したのであつた。

其の後英國民族の中世史完成の爲めに努力したものはスタッブス（William Stubbs）ロミリー卿（Lord Romilly）、ハーデー（Thomas Duffus Hardy）其の他ロバートソン（Canon Robertson）の如きがゐたが、彼等も亦單なる學究の徒ではなかつた。例へばその内スタッブスの如きは一八六三年以來二十五ケ年も此の方面の歴史の研究に從事し又多數著書もあつたが、彼はチエスター又はオックスフォードの僧正でもあつた。彼等の著書は記錄所本（Rolls Series）と云はれる程で卽ち政府出版物としても知られてゐる。英國では一八三七年記錄委員會（Record Commission）が廢止されて後之は單に記錄所（Rolls）と云はれたが、之は Public Record Office 又は Records Court とも云はれ、半官的なものであつた。

英國の民族主義的な歴史的記述は佛獨の兩國に比し、やゝその力の弱さを應ずるのであるが、第十九世紀になるとその反動として强硬なものを見るに至つた。ケンブル（John Mitchell Kemble 1807—1857）とかフリーマン（Edward Augustus Freeman 1823—1892）の著の如きはそれで前者の「英國に於けるサクソニヤ人」及び後者の「ノルマンの英國征服史」とか又後者の「歐洲に於けるトルコ勢力」の如きはその一例である。

英國民がチューートン民族に指導された中世以來、國民的偉大さを示した英國の歴史家の内、最も强硬

な民族主義的史觀を所有するものはフルード（James Anthony Froude）であつたが、彼はニューマンの感化を受けカーライルと共に英國革命の榮譽を說明しクロンウェルの德を讃美した。彼の著はマコーレー（Macoulay）の英國史と等しく歷史文學によつて英國に貢獻した最も輝しいものであつた。之等は學術的に云へば歷史的事實に矛盾した點があつたにせよ、其は他の點に於て價値付けられた。マコーレーの如きは二十年間修史の事業に從事したのであるから勿論歷史家ではあらうが、政治家で、評論家で又雄辯家でもあつた。そして辯護士であつて後には下院議員又陸軍大臣にもなつたのであるから、之を單なる學究の徒と云ふ事は出來ない。

更にスタンホープ（Earl of Stanhope）は「ユトレヒトの講和よりヴェルサイユ講和に至るまでの英國史」に於て第十八世紀の英國史を說明してゐるが、保守的な立場からその時代の英國政策を是認し、又ナピール（General William Napeier）は「一八二四—四〇年の半島戰爭史」に於て英國兵の勇敢であつた事を述べ、人類社會に於ける活動的素因の一現象としての戰爭を辯護し英國の政策を讃美したのであつた。更にシーリー（John R. Seeley 1834—1895）になると歷史記述に於て博學と民族史觀の兩方面を備へ、多數の實例を以て英國の發展及び英國政策の變遷を記述し、英帝國の發展を誇らしやかに記載したのであつた。彼は又民族史觀の所有者であると同時に帝國主義的な史觀を有してゐた。又彼は歷史を國家學又は政策發展の經過として見たのであつた。彼は元來ケンブリッヂ大學のラテン語の敎授で後、近

世史の教授に轉じたのであつた。

英國で大民族史を大成したものはグリーン（John Richard Greene）で、その英國小史（一八七四年）はドイツ的理論を以て用心深く英國一般國民生活の發達に關する多くの記述を試みた。そして彼も亦單なる學究の徒でなかつた事は、彼が一八六〇—六九年には牧師で、始めはカンタベリー大僧正の司書として史學を專攻したものであつた事によつても知られる。

斯樣に英國では民族的熱情の發達と共に遂にはセシル・ローズ（Cecil Rhodes）傳とか、ブーア戰爭に關する作物を見るに至り、民族主義的文學をも出版されるに至つた。之はシーリーの學問的な把握より遙に發展してジーベルとかベルンハルディの態度でもあつた。殊にクランブ（J. A. Cramb）になると英國の過去の戰爭を貫く精神を看破し道理を繼承する大なる英雄主義の力を說き、ゲルマニヤを神の如く崇め、將來に於ける世界の救濟をなすには英國の世界的勝利が必要であるとさへ說くもので、「倫敦の實力は他の人種が曾て試みなかつた世界の隅々に至るまで到達し、之等の地方に保護を與へて特色ある方法で國力を進展せんとするものである」と云ふに至つた。彼は史學教授として多分に時代の政治的特色を容れて、一方に於て政治家的見識をも示してゐるのである。

五

此の關係をイタリヤに於て見ると、イタリヤ人はローマ帝國の後繼者であるだけに、歐洲では最も立派に民族史料を蒐集し、編纂してゐる。古代ローマは世界國家であつて民族的國家にはならなかつたから古代から民族的史料が集められたのではない。イタリヤと云ふ限定された意味では左程古いわけでもない。卽ちイタリヤでは第十八世紀ムラトリ（Lodovico Antonio Muratori 1672—1750）によつて始めて民族的史料蒐集上に手腕が示されてゐる。ムラトリはイタリヤの民族的な史料を集め一七五〇年には既にフォリオ版二十五冊の史料を出版したが、それは西紀五〇〇—一五〇〇年の間の廣い範圍のイタリヤの歷史の史料を蒐集したのであつた。

此のムラトリは勿論歷史家ではあつたが、神學博士であり、又アンプロジャナの圖書館員でもあつて著書も六十部以上に達する古典學者であつた。尙ほ彼の後一八三三年になるとアルバート（Charles Albert）はイタリヤ民族史料蒐集の運動を助けて二十二冊を出版し、中世イタリヤ史の多くの材料をも編纂した。

第十九世紀の初期ギオコ（Vincenzo Gucco 1770—1823）はフューマニズム全盛時代のイタリヤ統一の失敗の理由を述べ、轉じてその統一はイタリヤ人のみによつて行はるべくその爲めには先づイタリヤの國民精神を作る必要があり、その決行に都合のよい樣に精神的環境を作るべきを說いたのであつた。卽ち史論を政治的實行にまで持つて行つたのであつた。又此の頃ボッタ（Carlo Botta 1766—1837）は革

命及びナポレオン戰爭の際に於ける「イタリヤ史」を公にし、此の時代の政策を發展させて遂にカルボナリー黨の活動にまで育てた程熱心に民族的自由統一を說いたのであつたが、彼も歷史家ではあつても始め醫學を修め、フランス革命の際は革命軍の軍醫として活動したのであつた。其の後トロヤ（Carlo Troya 1785—1853）はイタリヤ中世史に於て、又トスチ（Luigi Tosti 1811—1897）はロンバルト同盟及びボニフェース八世に於て中世イタリヤ史を說明したが、彼等は法王の指導の下にイタリヤを統一すべきを述べ、ダンテを禮讚し政治に關する敎會及び法王の力を讚へたのであつた。

又ダッェリオ（d' Azeglio 1798—1866）は中世及び近世を通じ法王が無力であつた事を述べ、サヴォヤ家の指導權を見出す樣にせんと努力した。彼は歷史家と云ふよりは寧ろ文學者又は政治家であつた。卽ち彼は一八四九—五二年にはサルヂニヤの首相であり、又小說を書いて文學生活を送つた事もあつた。然し一貫してイタリヤ愛國心を鼓舞する事に努力した。

次にバルボ（Cesare Balbo）は一八四六年イタリヤ史を公にして法王もサヴォヤ家も共にイタリヤ聯邦を組織するには役立ち得る事を說明し、フェラリー（Guiseppe Ferrari 1812—1896）は一八五八年イタリヤ革命史を著して、中世イタリヤの政治的解放戰爭を伴へる國民の努力、暴動、慘虐の行爲を讚美した。そして此の事は第十九世紀中葉以來のイタリヤ統一時代に於ても云ひ得ると述べた。此のフェラリーはヴィコ（Vico）の後を受けて歷史哲學を研究して著作集を公にした歷史家であつたが、哲學者で

もあつた。そして一八四二年にはクーザンの斡旋でストラスブルグ大學の哲學教授となつたが、ウルトラモンタン黨の爲めに罷免された。又議員としてイタリヤの合併運動に反對した事もあつた。

其の他イタリヤではヴィラリー（Pasguala Villari 1827—1917）は先づイタリヤ中世史の歴史的記述を試み、文藝復興時代のフローレンス其の他サヴォナローラとかマキヤヴェリーの如き英雄について說明したが、其の間彼はイタリヤ統一運動を激勵する事を忘れなかつた。彼は又その手段としてイタリヤ中世史を通俗化する事に努力したが、彼の數多い著書の內で「フローレンス史」はその最も優れたものであつた。卽ち彼は歴史家であつたが一方一八四八年にはイタリヤの獨立運動に參加して之を助け、一八六七年には代議士として、一八八八年には上院議員として働き、遂には一八九一—九二年には文相ともなり最後に一九〇三年には國際史學大會でその會長を務めたのであつた。

尙ほイタリヤで國民史を通俗化する事に最も重い役割を演じたのは、カンツ（Cesare Cantu 1804—1895）であらう。彼の處女作「イタリヤ國民史」は甚だ廣く讀まれ、寧ろ文學者の役をさへ演じたのであつた。此の關係はカルヅッキー（Giusue Carducci）やダヌンチーオ（Gabriele d' Anunzio）の如きイタリヤ文學者又は志士がイタリヤの國民的感情の統一に對し極端なる表現を用ゐ、その詩の中に强いイタリヤ國民的統一感情を歌ひ、之が爲めに遂にはイタリヤにファシズムが現はれて民族主義が歴史哲學から宗教の水準にまで達した事と對照せらるべきであらうと考へる。

六

ロシヤでは學問的主張を持つ最初の總括的な歴史としてはシチェルボトフ（Michael Shcherbotov 1733—1790）の「最古代よりのロシヤ史」が擧げられる。此の本はロシヤ國民的發展の最も盛な時代を書いたもので、ロシヤ國民史完成に關しては指導的な役割を務めてゐる。之よりももつと時代は下るが用意周到に書かれ學問的なものとして多くの價値を有するものはカラマヂン（Nicholas Karamazin 1766—1826）の「ロシヤ國民史」であらう。此の本はロマノフ家がロシヤ史の場面に現はれるまでの歴史を語るもので浪漫的時代に出來たものであつた。之はロシヤの天才に關して說明し、ロシヤの國民的文化を以て西方のそれよりも數等優れたものと考へたのであつた。その理由はロシヤは東ローマ文化を繼承し其寺院及び貴族的な政體を持つと云ふ點にあつた。そして以上兩著者はロシヤの君主、支配者を以て國民的英雄として尊崇し、又共にロシヤ文學者としても著名で、カラマヂンは一八〇〇年以後は專ら歴史研究方面に熱心し、アレクサンドル一世の史料編纂官となり十二冊からなるロシヤ通史を公にしたのであつた。

其の後ロシヤで最も多く西歐歴史學派の影響を受けたのはソロヴィエフ（Sergius Michailovitch Soloviev）であらう。彼は一八五一—七九年に「最古代よりのロシヤ史」と題する二十九冊の本を出版し、泰西

史學家達の賞讃の的となつた。彼はモスコー大學の史學教授であつたが、彼も亦、ペートル大帝の事業に絶讃の言葉を提供する事を忘れなかつた。

尙ほコストマロフ (Nicolai Ivanovitch Kostomarov 1817—1885) は國民的發展途上にあるロシヤ人の傳記、行爲、習慣等土俗學的な史料をも蒐集し、ウクライナをもロシヤの邊境史の內に入れた。そして彼はペトログラード大學の史學教授であつたが一方「小ロシヤ民族生活復興會」を創立した。又ウクライナ語でよく詩を作り、テレミヤ・ハルカ (Teremiya Halka) と云ふペン・ネームで廣く知られてゐる。

我が國で廣く知られてゐるロシヤの歷史家としてはクルチェウスキー (Vasiliev Kluchevsky 1841—1911) がある。彼はその著「ロシヤ史の經過」に於て祖國の爲めに貢獻する所多いが、此の著はロシヤの國民生活、制度及び國民性の發展を說明し、近世に於ける記述的歷史の最も優れたものであつた。彼はモスコー大學の史學教授で社會學的史觀の代表的人物であつたが、ロシヤの植民及びその發展の重要なる事を述べ、職業的な汎スラヴ主義者ではないが、汎スラヴ主義的傾向を持つ國民主義者であつた事は明であつた。

一九一七年の革命以來ロシヤでは帝政時代を研究する事又之を讃美する事を賤しむ傾向が認められるが、その歷史家方面の代表的人物としてはポクロウスキー (Mithail Nikolaevitch Pokrovsky 1868—1932) を擧げる事が出來るであらう。彼はロシヤ史についての一般マルクス派の人々の役割を務め、一九〇七

年には在ロンドンのロシヤ社民勞働黨大會に出席し、その席上ボルシェヴィキー中央部員に選ばれた。一九一八年五月には文部人民委員會次官となつた。そしてマルクス主義歴史學者協會は彼の提唱創設にかゝる。彼の著書には「ロシヤ史概觀」の外「第十九世紀に於ける帝政ロシヤの外交と戰爭」等多數あつて二十世紀に於けるロシヤの對外政策の特殊性をロシヤ民族を中心に詳說してゐるのである。

七

最後に吾人は米合衆國について歴史觀と政治との關係を考察して見ると、此の國では第十九世紀末まで公に民族史料を蒐集する用意はしなかつた。其の理由は米國に於ける聯邦組織の特殊性と、慣習上の特異性とに依る事と、又政黨其の他の要求により只だ自然科學的興味に人々が多く注意を集中した事によると考へられてゐる。卽ち米國の此の試みのあつたのはフォース（Peter Force 1790—1868）の貧弱な計畫に始まる。彼は米大陸の發見當時から憲法成立當時に至るまでの史料を完全に蒐集する事を希望した。勿論之は國民的なものであつたが、政府の補助がなく完成されずに終つた。

從つて米國史料として出版されたものは各州別々の歴史協會から出版されたものに始まる。其の經過を見ると先づ、スパークス（Jared Sparks 1789—1866）の「米國革命に關する外交通信」と云ふ十二冊本がある。それはワシントン傳及びその關係文書等を編纂したのであつた。彼は歴史家であると同時に

教育家で、學生時代には大工としてき働、又小學校に教鞭を取つた。始めは自然科學に關する哲學的考察を極め、ユニテリアン・チャーチの牧師となつた事もあり、ノース・アメリカン・レヴューの編輯に從事した事もあつた。

米國で最も立派な國民史料蒐集事業を完成したのはH、バンクロフト（Hubert Howe Bancroft 1832--1918）であるが、彼は第十九世紀の後半、太平洋岸諸國の史料を集め、之を三十九冊本として公にした。然し彼は不幸にしてよき助手と豐富な資金に惠まれず、爲めに批判的な學者的態度とか注意深き編纂の方法に於て屢〻缺點を爆露し、歴史家としてよりは寧ろ人類學者として認められ、その藏書四萬五千冊は主として人類學關係のものであつた。然し彼の名著北米太平洋岸史四冊は正に劃期的のもので、之以來米合衆國を一括して見た歴史が出來て來たとも云へる位である。

然し此の頃までの米國史は大多數、批判的な歴史的編纂者によつてされたと云ふよりは寧ろ博學な好事家によつて單に史料が集められたと云ふに過ぎなかつたから、その編纂事務に於て殆んど統一がなかつた。

ハッス女史（Miss Adelaide Hasse）は米國の經濟史料社會史料を分類記述して數冊の本として出版し各聯邦の公文書を有效に使用せしむるに至つた。之は決して纏つた民族史料を學問的に蒐集する事には成功したものではなかつたが、然し一女史として民族的な方面に留意した事は一の特色として見られる

であらう。只だ米國では此の頃まで纏つた民族的精神が認められず更に適當な財政的後援が此の方面の研究に對して拂はれなかつた。之は米國の特殊性として見る事が出來る。

總じて米合衆國の民族主義的な纏つた歴史編纂に於ては、その植民の浪漫的時代又は米國の獨立に對する努力時代に人々の勢力が注がれた。此の時代を描寫せるものにはG.バンクロフト（George Bancroft 1800—1891）の「アメリカ發見時代よりの合衆國史」がある。彼は之によつて華かな言語學的な特色を發揮し、米國人は勇敢に壓迫から脱して植民を爲し、遂には獨立を企圖したが、之こそは文明化された人道上の自由の爲めの道德的で公平な愛國者の十字軍であると揚言したのであつた。又米國の憲法を以て統一的で精神的な巨人達の團體から生れたものと説明し、そして此の憲法は古今未曾有のものであつて、過去に於て無かつた樣に將來に於ても匹敵するものなく、又之を實施するものは之を作つた人々より更に優れてゐると述べた。然しバンクロフトは此の種のパイオナーであるだけに理論の不正確な點はあつたが、それは後輩によつて完成された。彼はハーバート大學で歴史を學びドイツ留學後は又母校で教鞭を取り米國史の編纂に從事したが、ボストン港の稅關吏となつたり、海軍長官となつたり、更に駐英大使、駐獨大使として活躍した程の政治家でもあつた。

然しバンクロフトは未だ英國を恐れ憚る傾向があつたが、パークマン（Francis Parkman 1823—1893）になると、英國に反對して却つて佛國の米植民事業に對し充分に信用を置いた。その佛國の米國植民事

情には英獨のそれと較べ更に多くの英雄主義的な記錄を遺す事を說明した。そして彼は米國の北部及び西部に於ける佛國人の活動に注目した。

尙ほ海事史の方面ではマハン（Alfred T. Mahan 1840—1914）は米國の獨立及び一八一二年の對英戰爭により米國の海軍が如何に發達したかを力說し、又米國の優勢になつたのは如何に海軍の影響によるかを說いたのであつた。彼は「史上に於ける海軍力の影響」と題する著を公にし、近世海軍力の進步を促進刺激する上に大なる貢獻のあつた人物であつた。彼は只の學究的な歷史家ではなく海軍兵學校出身の海戰史家で南亞戰爭の際は大佐として出征し、又米西戰爭にも參加したのであつたが、遂には政治的にも活動してハーグ世界平和會議員ともなつた。

最近ではローズヴェルト（Theodore Roosevelt 1858—1918）を擧げなければならぬのであるが、彼は米國發展の進路は最初西方に向けられ、人々は無考な誤傳にかられて西方にあこがれたが、他方に於てそれは愛國的で熱心な民族的帝國主義でもあるとその著「西部に於ける採鑛業」の內に記載してゐる。彼は第二十六代の米國大統領であり單なる學究の徒でない事は說明を要しないのである。彼の歷史關係の著書としては「進步主義」（Progressive Principles 1913）とか「米國人と世界大戰」（American and the World War 1915）等があつて、又進步主義の歷史家であるとも云はれよう。

第十九世紀末になると米國にドイツの歷史學の風も這入つて來て、アダムス（Herbert Baxter Adams

1850—1901）はフィスケ（Fiske）の風を繼承し、バーゼス（Burgess）と共に精進した。そしてアダムスはジョン・ホプキンス大學で有名な歴史學研究所を開設したが、その内から多數の歴史家、政治學者を出したが、ウィルソン（Woodrow Wilson）の如きもその一人であつた。

斯樣に米合衆國に於ても多數歴史家の史觀はその時代の一般國民的要求に影響されるもの多く、寧ろその時代の政治其の他を指導したものと見られるものさへ多いのである。而もその人の多くは學究的なものでなく、象牙の塔から飛び出して活躍したのである。否寧ろ歴史家と云ふよりは政治家それ自身であるものさへあつたと云ふ事は吾々が史を讀む際に特に注意する所である。

吾人は今史觀と政治と題して史家の史觀に對し如何に多く政治が作用してゐるかを古今東西の歴史に亙つて概觀して來たのである。それが良い事か惡い事かは別問題としても、それは事實である事を述べた。尚ほ此の小論は簡決鮮明を主とする爲め一々の論據文獻等を擧げなかつた。詳細については改めて纏めたいと考へる。又内容にもられた一々の史實については普通の編纂物乃至は辭典類にでも明記してゐる事であるから一々據り所を擧げる繁をさけた。尚ほ又論旨に至つては之と正反對に、各時代から政治的に抑壓されたが故に之に刺激され、持久的な實力を育成して强硬な史觀として發展したと考へられるかも知れぬ。何れにしても此の小論に關し更に讀者の示教を乞ふ事が出來れば欣幸の至りである。

（昭和一四・一・三〇）